

spinster の変遷とその表象

— ギャスケルの spinster たちに関連して —

大嶋 浩

1 spinster の語義の変遷：糸紡ぎ女、未婚の女性、老嬢

spinster という語は 1960 年代の性革命以後ではほとんど使用されなくなった用語であると言われているが、法律用語としてはその後も生き続け、例えばイギリスでは結婚証明書上は一度も結婚したことがない女性は今なお spinster（男性の場合は bachelor）と分類されている (Trimberger 444; “Marriage Certificate”)。

そもそも spinster が未婚の女性を意味するようになったのは 17 世紀であり、本来は糸を紡ぐ人を意味していた。『オックスフォード英語辞典』(以下 *OED*) によれば、spinster という英語が登場するのは 14 世紀中葉 (*OED* の初出は 1362 年) で、「糸紡ぎに従事する女性、ないしはまれに男性、特に定職としてそれに従事する者」という語義が与えられている。中世後期、商業・産業が発達して様々な職種が誕生するとともに、インドから中東を経由して糸車が西洋に入ってきて、13 世紀のフランスに職業としての spinster が登場し、やがてイギリスにも糸車が輸入されて職業としての spinster が登場してきたのであった (“Spinning Wheel”; 久保田 97)。

イギリスでは 16 世紀半ば、職人法 (1563) が制定され、12 歳以上 40 歳未満の無職の未婚女性は一般に合法的な職種に従事するよう規定される (Tawney 344-45)。しかし、男性中心の手工業ギルドは女性を閉め出し、専門的技術を必要としない下働きで低価格の領域、とりわけ糸紡ぎの仕事が唯一女性に残された職業となっていた (若桑 366-71)。そして 17 世紀になると spinster という用語は、法律用語として、一般に未婚の女性を意味するようになり (*OED* の初出は 1617 年)、この用法は先述したように今日まで生き続けていくことになるのである。

さらに次の世紀になると、spinster は、未婚の女性の中でも増加しつつあった適齢期を過ぎた未婚の女性、すなわち老嬢^{オールド・メイド}を意味するようになる (*OED* の初出は 1719 年 ; Stone 40)。

しかもこの世紀の後半に、性差に関する科学革命が起こり、男女間の比較解剖学

的・生理学的差異の発見によって、ガレノス流の古い性差のモデル（相同理論ないしワンセックス・モデルと呼ばれるもの）は生物学的相違に基づく新しいモデル（性の相互補完性の理論ないしツーセックス・モデルと呼ばれるもの）に道を譲っていくことになる。つまり、男性と女性の関係を平等か不平等かの問題ではなく、相違の問題としてとらえるようになるのである (Laqueur 1-41; Schiebinger 189-91, 216)。この医学上の新しい証拠や理論は、平等主義者たちの反論をかうことになるが、啓蒙時代の補完論者たちにお詫え向きのものとして受け入れられていくことになる (Schiebinger 220-21, 227-30)。そして、すでに17世紀には存在していたのであるが、1780年から1830年の間に全ての階級の男女双方にも浸透して、ヴィクトリア朝の主要な社会的イデオロギーとなっていくもの——「ドメスティック・イデオロギー」と呼ばれる家庭重視の *separate spheres* 論 (Roberts 14)——の形成に重要な役割を果たすことになる。さらにこの理論は、男女が対等なものではなく一つの精神的統一の相互依存的な部分をなすものであるからには、「両性間の関係は（自由主義理論において言われるような）契約的なものではなく、むしろ愛情に基づくものであるべきだ」という主張 (Schiebinger 225) を擁護し、友愛結婚の台頭を促していくことになる。

かくして、全ての階級の女性に対して結婚と家庭と母性の神聖さの理想が称揚されていく時代風潮の中で、次第に増加しつつあった *spinster* たち、つまり婚期を過ぎて結婚していない、あるいは結婚できないでいる老嬢たちは格好の風刺の対象となり、一種の文芸上のステレオ・タイプができあがっていくのである。

2 老嬢の表象の変遷：老嬢の表象の3つのタイプ

(i) 18世紀から19世紀前半：風刺的タイプ

イアン・ワットは、18世紀の文学には「^{オールド・メイド}老嬢」と呼ばれる「卑しむべき連中」について数えきれないほどの「文学的戯画」が生まれ、スティールの『優しい夫』(1705)におけるティプキン夫人から、スモレットの『ハンフリー・クリンカー』(1771)でのタビサ・バンブルに及んでいる、と指摘している (150)。そうした老嬢の典型は、ホガースの『一日の四つの時』(1738)の中の「朝」に描かれている老嬢にも見てとることができる (図1)。その版画では、コヴェント・ガーデンの冬の朝、一人の着飾った老嬢がボーイに祈祷書を持たせて聖ポール教会の7時



図1 ホガース『一日の四つの時』の第一図「朝」(1738)

Vol. III of *The Complete Works of William Hogarth* (London: William Mackenzie, n.d.)

の礼拝に行く情景が描かれている。彼女は扇子を口に当て、男女の戯れにいかめしく眼を背けているが、そのいかめしい顔つきの中に「押し殺された興味の表情」がたくみに描き出され、彼女の気取った淑女ぶりが風刺されている(桜庭『絵画と文学』28)。

こうした18世紀の取り澄ました老嬢の戯画は、19世紀に入るとディケンズの『ピクウィック・ペーパーズ』(1836-37)の、その「態度には重々しさが、歩き方にはおさわり無用といった近寄りたさが、眼には威厳が具わっていた」という皮肉な言葉で紹介されるウォードル嬢に引き継がれていき(96; 桜庭『小説と絵画』89)、やがて *old maid* という語に、「老嬢を思い出させるような、取り澄ました、小うるさい、ないしは、神経質な女性」という比喩的な用法が生まれてくる。*OED* のこの用法の初出は1851年なので、この頃までにこの種の老嬢のステレオ・タイプ化が一応達成されたと考えてよいであろう。

18世紀以来の、この種のステレオ・タイプと化した老嬢のイメージを最もネガティブに描き出しているものとして、アン・ブロンテの『ワイルドフェル・ホールの住民』(1848)にでてくるジェイン・ウイルソンを挙げることができそうである。正直者の弟とその妻を粗野な人たちと軽蔑して別居した彼女を、「ある種の、けちで、冷淡で、不愉快な上流気どり」の持ち主で、「他人に役立つことは一切せず、わずかに自分のためにするだけ」で、「手芸と醜聞に日を費やし」、「誰も愛さず誰からも愛されず—無情で、尊大で、舌先鋭く、陰険に口やかましい老嬢」だと、ミス・ハンティンドンは想像している(427)。シャーロット・ブロンテの『シャーリー』(1849)の第2巻第11章で キャロラインが描く老嬢のイメージも同様に暗く、ネガティブなものである:「あなたたちの周りで娘たちの多くが衰え、肺病や消耗病で死んでゆく。あるいは、もっと悪いことに、不機嫌な老嬢—妬み深く、陰口好きの、惨めな老嬢になってゆく。なぜなら、彼女たちにとって人生は砂漠なのだから」(330)。

しかし、『シャーリー』の第1巻第10章では、上辺は「気難しく」、「魅力に欠けて」いても、称えるべき「不屈の精神」や「慈悲心」、「誠実さ」等を具えた老嬢（ミス・マンとミス・エインリー）が素描されていて、より共感的・同情的な筆致を認めることができる（154-56）。特にミス・エインリーは「多くの婦人が深い敬意を払」い、「尊敬せずにはいられ」ない、「多大な善良さ、多大な有用さ、多大な温厚さ、忍耐心、実直さ」を兼ね備えた老嬢として、キャロラインは「恭しくミス・エインリーの心の前に自分の心の頭を垂れ」ることになる（157）。とはいえ、彼女はその老嬢の生活を「あまりにも愛されることが少ないゆえに、たいそうわびしい」ものと見ている（157）。老嬢の生活はまだ全面的に肯定されるに至ってはいないが、ミス・マンに対するような同情的な見方から、さらに一步「尊敬・敬意」の方へと歩を進めているものとして注目に値する。

(ii) 19世紀中期から19世紀後半：同情的タイプから尊敬・敬愛されるタイプへ

19世紀半ば、いわゆる「余った」女性たちが社会問題となり、女権運動も台頭してくると、ヴィクトリア朝のいわゆる感傷癖とも相まって、老嬢に対する同情的・感傷的な見方が生まれてくる。ブロンテのミス・マンやミス・エインリーはそうした新しい流れに棹さすもので、テニスンの、恋人に見捨てられた乙女を歌った「メアリアナ」（1830）はその比較的初期の例といえる。このタイプはやがてディケンズの『大いなる遺産』（1860-61）のミス・ハヴィシヤムからギッシングの『余計者の女たち』（1893）の困窮した老女たちへと連なっていく、一つの系譜をなしてゆくことになる。文学上のステレオ・タイプとして、1860年代初頭には旧来の風刺的タイプにとってかわっていたと言われている（Hickok 122）。

このように、18世紀以来の風刺的タイプから19世紀半ばの同情的タイプをへて、やがて世紀後半には「まれな例外として」ではあるが、「聖人のような、満ち足りた」タイプの老嬢さえ登場してくる（Hickok 128）。ジョージ・エリオットの「アガサ」（1869）である。ミス・エインリーも「聖者と呼ぶ人もいるかもしれない」（156）ようなタイプの女性であったが、その生活は「あまりにも愛されることが少ないゆえに、たいそうわびしい」ものと記されていた。しかしアガサは聖人のようでもあれば、エインリーには十分に与えられてはいなかった愛にも満たされている、「ほんとうに大変幸福な」（l. 245）老嬢として、エリオットは全面的にその生活を肯定し、称賛し、伝統的に多かれ少なかれ貶められて描かれてき

た老嬢の姿と地位を最高度に高めている。

アガサは、エリオットがドイツのセント・メルゲンへ小旅行した折に出会った、実在の一人の老女がモデルであると言われている。この詩においてアガサは、「貧しい孤児」であった彼女を雇った「病める老夫婦」が「30年まえに」死んだとき、彼女に残してくれた「屋根の低いコテージ」に、従姉妹である二人の老嬢と共に暮らしている (II. 159-60)。三人の老嬢は「日々のパン」(I. 166)を得るために、「隣人たちの手助け」(I. 168) — 「あらゆる種類の雑用、つぎはぎ仕事や繕い物、干し草のひっくり返し、病気の子どもの面倒をみること」(ii. 170-72) — をする。また、心優しきアガサは「兵隊に行ったハンスのために」、あるいは「[自分より]恵まれていない」人びとのためにお祈りをする (II. 180, 183-86)。その返礼に、村人たちはアガサたちが決して困ることがないように取りはからうのである。このようなアガサを、村人たちは「この世の過てる人たちと神の両方を愛することによって / 疑いなくも両者の橋渡しをした人」として敬愛し、「半ばおばあさんで 半ば聖人である人の名前を呼ぶように、 / 敬虔な陽気さを込めて」、彼女の名前を口にする (II. 291-92, 286-87) :

The lads

And younger men all called her mother, aunt,
Or granny, with their pet diminutives,
And bade their lasses and their brides behave
Right well to one who surely made a link
'Twixt faulty folk and God by loving both:
No one but counted service done by her . . . (II. 287-94)

村人たちが愛唱する、「彼らの生活の中から生まれた歌」(II. 306-07)の一節には、この三人の老嬢のことが、以下のように歌われている：「汝らは母と仰がれる人、我らが病気になれば、 / すぐさまかけつけて 我らを助けてくれる。 / 聖なるガブリエル様よ、百合をたずさえ持つ御方よ、 / 母なる老嬢に神のご加護が与えられますように！」(II. 356-59)

エリオットが描き出した「幸福で有用な老嬢」(Hickok 128)アガサの姿は、

18・19世紀の老嬢の表象のコンヴェンション、風刺的タイプとも同情的タイプとも異なり、ブロンテのミス・エインリーにその先駆けが見られる尊敬・敬愛されるタイプをほとんど理想化の域にまで積極的に推し進めたものといえよう。

3 ギヤスケルの *spinster* たち

こうした老嬢の表象の3つのタイプを念頭に、「独身女性の問題に関心を寄せて」(Williams, *Women* 109)いたギヤスケルが短編等に描きだした老嬢のいくつかを概観してみよう。

(i) アナベラ、ドロシー、ソフロニア

例えば、「モートン・ホール」(1853)に登場する3姉妹の老嬢のうち、家族の者たちに反対されて愛する貧しい牧師補と結婚できなかった失意のアナベラは同情的タイプ、何とか結婚しようと努力を重ねたドロシーや何かと長女の威厳にこだわるソフロニアは風刺的タイプと言えるであろう。

(ii) スーザン、リビー、ネスト、メアリ

「一時代前の物語」(1855)の主人公スーザンは、「微笑むことはついぞなく、不必要な言葉はほとんど口にしない—背が高く、やせこけ、こわい顔の、骨張った」(246)老嬢であるが、自己犠牲的に精神的障害をもつ弟の世話をしたためにそうなった孤独な女性として、ミス・マン的な同情すべき過去をもつ老嬢として描き出されている。しかし、ネリー親子に家を提供し、彼女の後半生の日々は「前半の日々よりもすばらしい」ものになって、物語は締めくくられる(287)。彼女のささやかな愛の行為が女性たちの愛と連帯を生みだし、スーザンはそれなりに充実した愛の生活を築いていくことになるのである。「リビー・マーシュの三つの祭日」(1847)の主人公リビーや「ペン・モーファの泉」(1850)の主人公ネストも同様である。アガサのように周りの者たち皆から強く慕われ、愛されているとまではいかなくとも、それなりに愛に満ちた生き方を築いていく彼女たちの人生は、敬意と愛に満ちた取扱いがなされ、ジェニー・ユングロウが指摘しているように、『老嬢』の価値を宣言するものにさえなっている(176)。ブロンテのミス・エインリーよりも肯定的ではあるが、エリオットのアガサほどではないものとして、ちょうど両者の中間に位置づけられるといえよう。しかも老嬢は一般に脇人物として登場する場合が圧倒的に多いことを思うとき、ギヤスケルがこれらの短

編で老嬢を主人公に据えている点は特筆に値する。

なお、スーザンでとりわけ興味深いのは、彼女がたくましく有能な小地主と設定されていることである。というのも、そもそも農場の管理はメアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』(1792)において、「社会に確立している不自然な差別」を排して女性が進出すべき公的領域の職業の一つとしてあげているものだからである(145, 152)。もっとも弟のためにやむを得ず独身を選んで独立農場主になり、苦勞の皺が顔に刻まれているスーザンには、自己犠牲の要素が強く、それだけ哀れな感じを抱かせるものとなっているが、たくましく有能な農場主であり、一家の大黒柱の役目を果たしていける女性として描き出されている側面に注目するとき、そのようなスーザンに、ウルストンクラフト的な一種のフェミニズム思想の穏やかな表れを読み取ることができるのではないだろうか。

『メアリ・バートン』(1848)の「敬虔で善良な」(258)老アリスの「萌芽」(Chappel 82)であると言われる、「貧しき人びとのスケッチ」(1837)に登場する老嬢メアリは、「独身だが、孤独ではない女性、賢く/常に思慮深く しかもこの上なく本当に親切な」女性で、「血縁の絆はなくとも 優しい有用な愛をもって/人びとの心と自分の心を結びあわせ/あらゆる変化に 思いやりを寄せて 即座に動こうと努め/それ故、あらゆる人から 彼女が尊ぶ、愛情を勝ち得た」女性である(II. 11-17)。故郷に帰りたいと願いながら叶わなかったこの老嬢の表象にも同情的要素が見てとれるが、これまで見てきたギヤスケルの老嬢の中で、エリオットのアガサに一番近いタイプの女性といえよう。この詩の執筆は1836年夏と考えられており、発表されたのは1837年1月である(Uglow 101)。ブロンテのミス・エインリーよりも約11年も前に、ギヤスケルは夫との共作によるこの詩の中ですでにアガサ的なタイプを素描していたことになる。⁽¹⁾ メアリも、アガサ同様、実在の人物をモデルにしていると言われている(Uglow 101)。しかし、アガサが「古き世界の名残が変化から遠ざけられて保存されている」ところ(I. 6)、つまり旧式で素朴な、いわゆるゲマインシャフト的な田舎に暮らす老嬢であるのに対し、メアリは、先述のリビーと同様、ゲゼルシャフト的な産業都市に暮らす下層階級の女性である。都会の労働者の中にアガサ的なタイプの先駆をいち早く積極的に描き出している点にギヤスケルの独自性があると言えるであろう。

(iii) ホーム・ドーターと女性の修道活動

最後に、「私のフランス語の教師」(1853)を見てみよう。この作品の語り手は初老の独身女性である。この語り手は母親の死後、そしてもう一人の姉妹(たぶん妹)が嫁いでいった後、残された父親の世話と看病に明け暮れる生活を送る。母の死後、二人の姉妹は主婦役の重責を二人して果たしていたと思われるが、妹の方はいち早く婚約し、やがて結婚して家を出て行ったので、結局、語り手である姉の方がいわゆる「ホーム・ドーター」として自己犠牲的に家庭の義務を果たしていったことになる。

興味深いことに、ドメスティック・イデオロギーに基づく、女性は皆結婚すべきであるという前提とは裏腹に、19世紀の富裕層には、娘の一人を独身のまま家庭に残し、家族の世話をさせる慣行があった。こうしたホーム・ドーターの慣行及び独身「余剰」女性問題等ゆえに、19世紀はまさに「未婚のおば」の全盛期だったのである(山口1-2)。

「私のフランス語の教師」の場合、語り手は、家に残った「未婚の娘が家族のために奉仕すべきという期待」(山口18)を立派に果たした19世紀の典型的なホーム・ドーターであったといえる。語り手は世話をする父親の死によって初めて自分の人生を生きることができるようになるが、「長い看護生活でかなり体調を崩して」(418)しまい、転地のために外国に出かけたきり、以後は独身のまま外国暮らしの生活を続けている。結婚した妹に子どもが生まれたかどうか、はっきりとはしないが、語り手は老嬢であるだけでなく、おそらく典型的な「未婚のおば」でもあったであろうと予想される。幸い語り手は、オースティンのエマが結婚する必要がないと断言した「裕福な独身女性」(58)である。裕福な独身女性として、語り手は進んで独身主義を選んだのか、あるいは、「長い看護生活」(418)で婚期を逸して老嬢となってしまったのか、定かではないが、いずれにせよ、裕福であったからこそ、父親の死後、男性の庇護がなくとも、独身のまま、外国の地で安楽に暮らしていけるのである。

しかし、現実にはホーム・ドーターとして家庭に縛られた女性は婚期を逸する場合が多々あり、また世話をする家族の死後、「十分な収入のない女性、特に、家庭に残るものとして、十分な教育を受けなかった女性」にとって生活は困難なものであったといえる(山口21)。また、独身「余剰」女性の問題と連動してホー

ム・ドーターの余剰という問題も生じてくることになるが、一方、ホーム・ドーターがいればこそ、他の姉妹たちは嫁いでいたり、“New Woman”のように家庭を出てキャリアを追求したりすることが可能だったといえる（山口 21）。ギヤスケルはナイチンゲールの姉パースィノープに宛てた手紙の中で、ナイチンゲールが公の場で活躍できるのはパースィノープが「家庭の義務」を果たしているからだという趣旨のことを述べており（Chapple 322）、彼女自身、ホーム・ドーターの問題をよく認識していたことを示している。「私のフランス語の先生」の語り手は、このホーム・ドーターの慣行を垣間見せ、上述したようなその慣行の持つ意義や問題点を考えさせるものとして注目すべき独身女性であるといえよう。

「私のフランス語の先生」には、独身「余剰」女性の問題との関連で、もう一つ注目すべき点がある。それは女性の修道活動の問題である。フランス人のシャラブル氏の長女スーズンは、妹のエメが「何が起ころうとも、けっして父親の元を離れるつもりはない」と断言して自ら進んでホーム・ドーターになることを望んでいることもあり、母親の死後、かねがね「家庭の義務と責任から自由になれたと思えたならば」なりたいたいと希望していた愛徳会修道女になるべく（419）、パリにやって来るのである。興味深いことに、この作品が発表された 1853 年といえば、英国国教会においても女子修道会が設立されつつあった時代にあたる。

そもそも、独身「余剰」女性が大きな社会問題となったとき、大きく二つの解決法が論議された。一つは、この新しい状態を受け入れ、独身の状態ができるだけ害あるものとならないようにするため、女性を教育し、職業を部分的に変更していかねばならないというもの。他の一つは、神の定めた自然の秩序から男・女を引き離す、この流れを止めることに精力的に取りかからねばならない—独身状態を安楽ないし魅力的にする、いかなることもすべきではなく、女性たちを植民地に移住させたり、できる限りの手段を尽くして、結婚を促進させるために最大の努力をしなければならない、というものである（Cobbe 594）。

大局的にみれば、前者の解決策に含まれることになるが、イギリスでは 16 世紀半ばの修道院解散以来、伝統的に、独身女性ないし老嬢の救済策として、繰り返し、カトリックの女子修道院に代わるものの設立が提唱されていた。19 世紀半ば、これがようやく実現する。オックスフォード運動（1833-45）の影響で英国国教会に修道院復興が起り、1845 年英国国教会の最初の修道女会 the Park Village

Sisterhood がロンドンに設立されたのである。以後、「プロテスタントの尼僧院」、あるいは軽蔑的な綽名として「ピュージー派の尼僧院」と呼ばれることもあった女子修道会が次々と設立されていく。1851年までに計6つ、1851年から1858年にはさらに9つが、そして1870年から1900年までにさらに15の女子修道会が正式に設立された。しかも女子修道会は男性の修道会よりも早く設立され、その数もより多かったのである (Williams, *Park Village* ix, 17, 20; Casteras 160, 167)。それだけ、女性からの要求・要望が大きかったといえる。1801年の国勢調査によると、女性は男性より約40万人多く、世紀中葉にその差はさらに広がり、すでに見たように独身「余剰」女性が社会的問題として取り上げられるまでになる (Williams, *Women* 3, 5)。女子修道会はそのような独身女性たちの一部を引きつけていったのである。

修道女は、「ヴィクトリア朝の女性らしさの理想、特に、処女性、従順さ、献身、精神性、慎み深さを完全に具現するもの」(Casteras 157)であったが、家庭を捨て去り、神に帰依して独身を通すその生活は、ドメスティック・イデオロギーに基づく、結婚と家庭と母性の神聖さの理想に反するものであり、女子修道会の存在意義を巡っては賛否両論の議論が起こることになる。また、女子修道会は、女性に家庭外での新たな活動の場を提供するものとして、いわゆる「女性の領域」なるものを「拡大するもの」であっただけでなく、修道女を含め、アングロ・カトリックの女性たちが行う司祭への秘密告解は、夫や父親の承認なく行われうるもので、家父長制への反逆行為という側面をも有していた。これらの意味に於いて、修道女の行う活動は一種のフェミニズムの要素を持っていたのである (Reed 225, 238)。

ギaskellは当時の女子修道会に関する論争に関心を寄せ、独身女性に活動・生活の場を提供し、「独身女性のための共同体」を作り出すものとして (McArthur 59)、むしろ好意的に見ていたようであるが、積極的にフェミニズムを推し進めると意識からではなかったようである。

「私のフランス語の先生」において、スーザンは年齢が行き過ぎていて愛徳会に入ることがかなわず、その代わりに恋人を見つけて結婚する。この結末の付け方は、Susan Casteras が「救出された尼僧症候群」と呼んでいる、当時の小説において人気を博した主題を幾分連想させる。この主題は一般に、高い塀の外にいる昔の恋人と密かに連絡を取り合い、その恋人の助けを得て、土壇場で修道院から解放されるというもので、最後にはその解放してくれた恋人と結婚するか、家庭

と家族の元へ戻るというハッピー・エンディングで終わることになる(178)。このように、この主題は女性を修道院に閉じこめることは、女性の本性に反した不自然なことだとするドメスティック・イデオロギーの擁護派ないしは反カトリック派・反高教会派の見解を色濃く反映したものとなっている。

スーザンの場合、彼女は恋人によって助け出されるわけではないが、修道会に入りかけたところ、それがかなわず、入会を断念し、その代わり、家族の元へ送り届けてくれた男性に「完全なる愛」を抱くに値する恋人を見だして結婚し、「よき妻」、「よき娘」として幸せに暮らしていくことになる(422)。「救出された尼僧症候群」の主題を大幅に水で割って薄めたようなこの展開に、妻や主婦、母になることを第一とし、次善の策として、女子修道会の設立・活動を擁護しようとする、ギャスケルの立場が窺えるのではないだろうか。それは、保守的な要素と穏やかなフェミニズム的要素を折衷した立場と言ってもよいであろう。

4 結び

本来糸紡ぎ女を意味していた *spinster* は、17世紀には未婚女性を、18世紀には次第に増えつつあった老嬢を意味するようになり、以後、老嬢としての *spinster* の文学上のステレオタイプ—風刺的及び同情的タイプ—が形作られ、19世紀後半には敬愛されるタイプさえ登場してくる。19世紀文学における老嬢の表象のこれら主要な3タイプを、ギャスケルはホーム・ドクターや女子修道会の問題をも取り込みながら、全て描き出し、ギャスケル文学の幅広さを見せている。

注目すべきは、19世紀中葉、風刺的タイプから同情的タイプへと老嬢の表象のステレオタイプが移行していく時期に、ギャスケルはエリオットのアガサ的な敬愛されるタイプの先駆となる老嬢を—主人公に据えて、あるいは都市労働者階級の中に—いち早く積極的に描き出しているということ、及び、彼女が描き出した独立農場主の老嬢や修道活動を切望する独身女性の中に、ギャスケルの穏やかなフェミニズムを読み取ることができるということ、ではないだろうか。

注

本稿は、日本ギャスケル協会第20回例会(2008年5月31日、於実践女子学園渋谷キャンパス)におけるシンポジウム「ギャスケル文学とスピンスターたち」での発表に基づいている。

- 1 この詩は夫との共作とされるが、イライザ・フォックスに宛てた手紙の中でギヤスケルはこの詩を「私の一つの詩」と呼んでいる (Chapple 33, 80)。共作とはいえ、その詩の大半はギヤスケルの手になるものと考えてよいであろう。

引用文献

- Austen, Jane. *Emma*. New York: Norton, 1972.
- Brontë, Anne. *The Tenant of Wildfell Hall*. 1906. London: Oxford UP, 1959.
- Brontë, Charlotte. *Shirley*. Oxford: Oxford UP, 2007.
- Casteras, Susan P. "Virgin Vows: The Early Victorian Artists' Portrayal of Nuns and Novices." *Victorian Studies* 24.2 (1981): 157-84.
- Chapple, J. A. V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Mandolin, 1997.
- Cobbe, Frances Power. "What Shall We Do with Our Old Maids?" *Fraser's Magazine* 56 (November 1862): 594-610.
- Dickens, Charles. *The Posthumous Papers of the Pickwick Club*. 1949. London: Oxford UP, 1971.
- Eliot, George. "Agatha." *The Complete Shorter Poetry of George Eliot*. Ed. Antonie Gerard van den Broek. Vol. 1. London: Pickering, 2005. 67-85.
- Hickok, Walter L. "The Spinster in Victoria's England." *Journal of Popular Culture* 15.3 (1981): 119-31.
- Laqueur, Thomas. *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud*. Cambridge: Harvard UP, 1990.
- McArthur, Tonya Moutray. "Unwed Orders: Religious Communities for Women in the Works of Elizabeth Gaskell." *Gaskell Society Journal* 17 (2003): 59-76.
- "Marriage Certificate." 4 March 2008 <<http://www.bmd-certificates.co.uk/articles/marriage-certificate.html>>
- Mrs. Gaskell. "Half a Lifetime Ago." *My Lady Ludlow and Other Tales*. London: Smith, 1890. 245-87.
- _____. "Mary Barton." *Mary Barton and Other Tales*. London: Smith, 1892. 7-399.
- _____. "My French Master." *Mary Barton and Other Tales*. London: Smith, 1892. 401-23.

- Reed, John Shelton. “‘A Female Movement’: The Feminization of Nineteenth-Century Anglo-Catholicism.” *Anglican and Episcopal History* 57 (1988): 199-238.
- Roberts, Elizabeth. *Women’s Work 1840-1940*. London: Macmillan, 1988.
- Schiebinger, Londa. *The Mind Has No Sex?: Women in the Origins of Modern Science*. Cambridge: Harvard UP, 1989.
- “Sketches among the Poor. No. 1.” *Blackwood Magazine* 41 (January 1837): 48-50.
- “Spinning Wheel.” *Encyclopaedia Britannica* 2002. Deluxe Edition CD. 2002.
- Stone, Lawrence. *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*. Abridged ed. New York: Harper, 1979.
- Tawney, R. H. and Eileen Power, eds. *Tudor Economic Documents: Being Select Documents Illustrating the Economic and Social History of England*. Vol. 1. London: Longman, 1953.
- The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. CD-ROM Version 3.0. 2002.
- Trimberger, E. K. “*Spinster Tales and Womanly Possibilities*, by Naomi Braun Rosenthal.” *Contemporary Sociology* 32.4 (2003): 443-45.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. New York: Farrar, 1993.
- Watt, Ian. *The Rise of the Novel*. 1963. Harmondsworth: Penguin, 1968.
- Williams, Merryn. *Women in the English Novel 1800-1900*. London: Macmillan, 1984.
- Williams, Thomas Jay and Allan Walter Campbell. *The Park Village Sisterhood*. London: S. P. C. K., 1965.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman*. New York: Dover, 1996.
- 久保田育子。「イギリス・ルネサンス演劇におけるヴィラーゴ：少年俳優が演じた『拒婚』の女」、『ジェンダー研究』9 (2006): 91-103.
- 桜庭信之。『絵画と文学：ホガース論考』。研究社、1964。
- 。『イギリスの小説と絵画』。大修館書店、1983。
- 山口みどり。「『ホーム・ドーター』：ヴィクトリア朝女性のライフコースからみた Separate Spheres 論」、『洛北史学』第5号（洛北史学会、2003）: 1-26。
- 若桑みどり。『象徴としての女性像：ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』。筑摩書房、2000。

(兵庫教育大学教授)

Abstract

**Historical Transition and Representation of the Spinster: With Some
Reference to Elizabeth Gaskell's Spinsters**

Hiroshi OSHIMA

The *Oxford English Dictionary* states that the word 'spinster' was first used in the mid-fourteenth century to describe 'a woman . . . who spins'; however, later, in the seventeenth century, the term evolved to mean 'the proper legal designation of [a woman] still unmarried', and then in the eighteenth century, its meaning became that of 'an old maid'. This historical transition of the spinster reflects the deteriorating status of unmarried women.

Interestingly enough, in literature, against the background of the growing domestic ideology and the increasing number of spinsters, or old maids, three major types of spinsters arose: the satiric type between the eighteenth century and the first half of the nineteenth century, the sentimental type between the mid-nineteenth and late nineteenth century, and the rare, respected type in the latter half of the nineteenth century. In a wide variety of her literary works, Elizabeth Gaskell depicted all three types, referring to contemporary problems such as the 'home daughter' and the religious order. In particular, it is noteworthy that Gaskell took the lead in presenting the respected-type spinsters, who include members of the working classes in the industrial society, not only as her minor characters but also as her main ones. Furthermore, it is significant that we perceive Gaskell's moderate feminism in her portrayal of a strong, independent old maid as a capable 'stateswoman', and of a single woman who wishes to join a religious sisterhood.